

『マルクス経済学方法論批判』への書評をめぐって

2014年1月12日

四つの柱

田中英明氏による書評に接したのを機に、あらためて本書を読みなおしてみたが、マルクス経済学が今日直面している問題を多少とも解決できたというより、むしろ将来の研究課題を多く残した気がして減入ってしまった。原点に戻って再考すべき問題はたしかに存在するのだが、それに近づこうとすると、次から次に新たな疑問が湧きあがり、それに押し流されまいと必死に向こう岸に泳ぎつくのがやっとだった。この難しさは、おそらく、別の立場の学説を批判するのではなく、我が身に染みついた思考フォームを自ら批判しようとしたせいかもしれない。このため、直接の対象は、若いころから慣れ親しんだ、いわゆる「宇野派」の理論に絞られた。かつて宇野弘蔵がマルクスの『資本論』を批判したのと同じ視線で、宇野弘蔵の著作を正面から批判する必要があったのである。

しかし、なぜそこまで方法論批判にこだわるのか。それは現実の資本主義が大きな地殻変動に直面しており、かつてはそれなりに説明できた世界が、どうにも見えなくなったから、というほかない。これは論理ではなく直感である。ただ現実をふたたび見たいのなら、直感ではなく、論理の力で新たな枠組みを再構築するほかない。本書はこうした内向きの関心に駆られ、もっとも気になる論点の解明を急いだあまり、問題の背景や経緯の説明を欠き、ところどころ論理に飛躍が生じて、読者をしばしば悩めたのではないかと危惧している。

このように不備な著作ではあるが、読者に次のようなことを理解していただければ、本書の目的はほぼ達成されたことになる。第1は、20世紀末に顕在化した新興資本主義諸国の台頭は、19世紀末にはじまる「帝国主義段階」という枠組では捉えられないという点である（グローバリズムの底流＝新興資本主義諸国の台頭）。第2は、この歴史的な構造転換を理解するためには、既存の重商主義、自由主義、

帝国主義という三段階に、新たな段階を追加するようなことではすまず、資本主義の歴史的発展を捉える新たな枠組を再構成する必要があるという点である（多重起源説）。第3は、発展段階論の再構成は、資本主義の基本像を解明する原理論そのものに遡って検討する必要があるという点である（原理論の再構築）。第4は、そのためには資本主義に構造変化を引き起こす諸契機に焦点を当て、それらが原理論のどこに、どのような分岐構造で伏在しているのかを掘り起こす必要があるという点である（変容論的アプローチ）。

少し不安な気持ちで『何が幹かを示す』ことに努めたい」という田中氏の要約を読み、そして先ほどの危惧はどうやら杞憂であったかと安堵した。はじめの3点は「Ⅰ 新たな資本主義の勃興＝彷徨いでた世界」で簡潔に整理されており、最後の4点目も「Ⅱ 『ブラック・ボックス』と『開口部』」で、本書にしたがえば「不可逆的な歴史的発展の分析とは異なり、分岐点とその諸契機の解明が原理論の課題となる」というツボを抑えた絶妙の説明とともに、的確に指摘されている。

変容と発展

肝心なのはこうした「解釈」に基づく「批判」なのだが、「Ⅲ コメント」を読むと、これだけ正確に要点を捉えたのであれば、もう少し正面から切り込んでほしかったと些か拍子抜けした。コメントの「1. 『起源』と『自己変容』」のポイントは、最後に示唆されている次のような批判であろう。変容論アプローチは、先進資本主義諸国の金融的再編や世界編成の変遷といった「自己変容」の解明を可能にするはずだが、本書ではこの可能性が充分活かされていない。その原因は、新興諸国に傾いた現状認識と「包摂＝内面化論」の偏重にある、というのである。

このことを言わんがために、田中氏は本書第五章における「大内力と伊藤誠の現状分析における原理論適用方法」を引き合いにだし、大内氏の景気循環の「変型」論よりも、伊藤氏の「逆流仮説」のほうが、「自己変容」の理論とよぶのに相応しいのに、逆の評価になっているのは妙だ、と迂言する。そういう面はあるかもしれないが、この第五章は、単一の資本主義像を基準に、それへの接近と乖離というかたちで資本主義の多様性を捉える方法一般の批判が眼目で、伊藤氏の逆流仮説も含め、こうした方法の特徴を際立たせるために、大内氏の方法を対比したまでのこと、その優位性を論じているわけではない。

そのうえで問題なのは田中氏が、伊藤氏を含め「世界資本主義論では、総じて、

世界的な蓄積過程の『内的叙述』といった表記のもとで、実際には産業構造の転換、証券市場のあり方といった外的条件が継起的に追加され、対応する蓄積過程の全体的な変化が演繹的に考察されている」と指摘している点である。本書に収めた諸論文は、発表の度に「世界資本主義的」だとレッテルを貼られ、「純粋資本主義」を標榜する人々から疎んじられてきた。第七章のもとになった論文を1981年に発表したときも、ある先生から「世界資本主義というのは不純な資本主義ということだ、そういうものを対象に原理論ができると思うのか」と早速ありがたい忠告をいただいた覚えがある。しかし、そうか思ってあらためて「世界資本主義」といわれる人々の著作を読むと、どうにも宗旨が合わない。

田中氏は「外的条件が継起的に追加され」と世界資本主義的方法を評価するのであるが、先ほど「ツボを抑えた絶妙の説明」だといった文をもう一度みてほしい。不可逆的な歴史的「発展」は、原理論で解明できる理論上の「変容」とはっきり区別すべきだと説いている。これは「世界資本主義」批判である。本書には、ナマの外的条件を直接「追加」するのは、原理論の「自殺行為」だという過激な表現まである。一般に、変化は「叙述」するもの、それを理論的に説明せんとすれば途端に難しくなる。この困難のために、原理論から歴史を閉めだす純粋資本主義か、原理論を「内的叙述」に解消する世界資本主義か、どちらかに傾く。変容論的アプローチは、この狭間を突破する試みである。変化を受容する開口部の内部構造を解明する原理論を基礎に、変化を方向づける外的条件によって継的に進む歴史的発展を分析する方法である。

田中氏が世界資本主義に対して上のような積極的理解を示すのは、「先進資本主義諸国の金融的再編」や「証券市場のあり方」に興味があり、変容論的なアプローチは本来こうした問題の解明に有効なはずなのに、本書ではそれが活かされていないという不満によるのかもしれない。もちろん、近年の「資本主義の金融化」とよばれる現象も含め、変容論的アプローチの有効性を追求することに異論はない。ただ本書の主題が20世紀末のグローバリズムの評価にあることも忘れないでほしい。この地殻変動の主因を、先進資本主義諸国の脱工業化に求めるのか（ネオリベリズム主導説）、漸進してきた新興資本主義諸国の台頭に求めるのか（グローバリズム底流説）、これが基本問題である。むろん現実には両者相俟って進むのであるが、発展段階論という観点からみると、いずれが主因かが決定的になる。主導説

なら従来の帝国主義段階の延長ですむが、底流説だと多重起源説のような抜本的見なおしが必要になる。この問題関心が、田中氏の目に「新興諸国」の偏重と映ったのであろう。

開口部の内部構造

コメントの「2. 原理論研究の細分化・解体傾向」のポイントは、本書が「開口部」を分化・発生論に接続するタイプと、包摂・内面化論に接続するタイプに二分したことに関わる。たとえば、どんなに商品経済の論理を駆使しても、それだけで金属貨幣が導きだされ、機械制大工業のもとで労働力は徹底的に単純化される、とはいえないだろう。商品のなかから貨幣が分化するというのと、その商品貨幣が金属貨幣になるというのとは論理レベルが異なる。労働過程が資本のもとで集団力をベースとした労働組織を形成するというのと、それが機械制大工業になるというのでも論理レベルが異なる。金属貨幣には信用貨幣、機械制大工業型にはマニュファクチュア型という対極が潜んでいる。そして、金属貨幣か信用貨幣かという分岐構造と、機械制大工業型かマニュファクチュア型か、という分岐構造とでは、一口に外的条件が作用する開口部といっても、その内部構造に対照的な差異が生じる。

こうした分岐の諸契機をいかに理論化するかは、まだほとんど手つかずの領域で、これからの原理論に託された課題である。本書ではひとまず、白か黒か、両極に抽象化し、それを段階的に積み重ねる、構造化の手法を模索してみた。白黒に二分はしたが、いろいろな灰色に細分化したつもりはない。学派の解体は恐れなかったが、原理論を解体した覚えはない。これが田中氏の目に原理論の「細分化・解体」と映ったのは本書の若か気、さらなる精進に励むほかない。

書評の周辺

なお、田中氏の書評が掲載された同じ号には、本書第九章に対象を絞った山口重克氏の評論が載っている。この第九章は、第八章「純粹資本主義批判」のもとになった論文が、宇野のテキストに対する著しい「誤読」「誤解釈」があると山口氏に批難されたので、あらためてテキストに即し解釈の典拠を示したものである。宇野の『経済学方法論』や『経済政策論 改訂版』を再読してみても、資本主義の歴史的発展が生成期・発展期・没落期の三段階で捉えられること、ただしこの「没落」は資本主義の「崩壊」ではなく、発展期にみられた純化傾向の「鈍化」の意味であること、第二次大戦後は「世界史的にみれば」社会主義への過渡期といってよいが、

それは資本主義に新たな発展段階を画するものではなく、その意味で従来の三段階説を修正する必要はないこと、こうしたことが記されている。

山口氏には、宇野が過渡期といったか否かがよほど重大であるらしく、今回の評論でもこの問題にたいへんな紙幅を割いているが、要するに、はじめ「過渡期かな」と迷っていた宇野が、上の改訂版の段階では「やはり過渡期ではない」と確信し、第二次大戦後も帝国主義段階だと結論づけた、と読みなさいということのようである。これに対して、本書は「世界史的にみれば」という点を重視し、第二次大戦後、社会主義圏が瓦解する心配はもうないと考えた宇野が、ただそれは従来の鉄道に平行してハイウェイが新設されたようなもので、全体としてみれば自動車交通への過渡期だが、鉄道としては蒸気機関車に取って代わった電気機関車の時代がまだ続いているという意味で、資本主義の発展段階論としては三段階説でよいと結論づけたのだ、と解釈したのである。そして、本書もそのかぎりでは宇野のこの判断を是とし、三・五段階や四段階にする必要はなかったと与している。ただ問題は、こうした三段階説で戦後の冷戦体制は捉えられても、第三世界の資本主義的発展に基礎をおく20世紀末のグローバリズムの現実は語れないという点にある。宇野が過渡期説を捨てようと捨てまいと、この基本問題は変わらない。

第九章は、山口氏との議論が、単に宇野のテキスト解釈の問題ではなく、背後にこうした問題を抱えていることを第三者に伝えたくて書いたものである。そのうえで山口氏に対しては、同道巡りに落ちている観のある議論から脱すべく「解釈と批判」と題した項を章末に添えておいた。山口氏はここだけ無視して、さらに一局所望されているようだが、もう観客は見当たらない、そろそろ打ち止めにする潮時だろう。

こんな息苦しい議論をしていると、無性に散歩がしたくなる。そうした散歩の途中、しばしば見ず知らずの方から行きずりに新たな着想のヒントをいただく。たとえば、森杲『アメリカ資本主義史論』は、冒頭の『共産党宣言』ロシア語版への序文をめぐる考察がたいへん刺激的で、合衆国とソ連邦という、実はよく似た両大国が、第三世界の発展を左右から抑圧する構造こそ、20世紀後半の基本プレートだという認識を誘発した。また昨年のもんく論題報告、平川均「世界経済の構造転換と新興経済」は本号に掲載されると思うが、都市を中心に萌芽し成長する局所的な資本主義化に、巨大な人口を抱える大国がマウントし、潜在的な消費が生産に連鎖す

る内発的な発展動力を具えた新興諸国に変貌するという指摘は示唆に富み、本書のグローバリズムの底流論との関係を探りたくて、フロアーから二度も質問させていただいた。そのほか、本書がなる過程で通りすがりの方々からいただいたヒントをあげればキリがない。こうした出会いを糧に、変容論的アプローチをさらに充実させてゆくことで、田中氏の批判にも答えてゆきたい。